

日本語・文化教育の一環としての季語作成授業試論

竹内淳之介（ザグレブ大学¹⁾）

ravienus.caesar@gmail.com

【要約】

本稿はネヴシェヒルハジュベクタシュベリ大学で担当していた文学科目とルーマニアン・アメリカン大学での和歌・俳句の特別講義の実践報告を例にして、日本語学習者の出身国の文化・風土に基づいた季語を日本語で作成し、その作成した季語を使って俳句・短歌を作成する授業の試案を述べたものである。授業の最終目標はクラスでオリジナルの歳時記・句集を編み、季語作成過程を通じて、日本や他国の風土・文化を学ぶことである。

1. 季語作成について

1.1 季語作成とは何か

本稿で言う季語作成とは、日本語学習者（以下、学習者）の母国語などで季語を作成するのではなく、現代日本語の季語を作成することを意味する。学習者の出身国の文化・風土に基づいた季語作成を目指すものであり、最終目標はクラスでオリジナルの歳時記や作品集を編むことと、季語作成を通して、日本文化（異文化）を学ぶことである。

1.2 季語作成の意義

日本文化（異文化）を理解するために、季語を用いることは有用であると友岡（1994）、小林（2021）では報告されている²⁾。そこから学習者が日本文化（異文化）を理解し、かつ日本語能力を向上させるために季語を作成する授業を思いついた。

日本国外で生まれ育った学習者が自明とする各季節を象徴する事物とそれに対する捉え方は、日本人（文化）と相違していることが往々にしてある。たとえば、友岡（1994）の報告によれば、与謝蕪村の句「菜の花や月は東に日は西に」は日本人の感性に基づけば春の句となるが、この句を聞いたドイツの学生は晩夏（秋）の情景を思い浮かべたという³⁾。

このように季語を学ぶことによって日本における事物の季節感と、学習者が持っているそれぞれの事物の季節感との違いを学ぶことによって、日本文化へのより深い理解が出来るようになるのではないかと考える。

また、季語を作成し、それを用いた創作活動をすることによって、学習者がただ講義を聞くだけの一方向の授業ではなく、双方向のより積極的な授業参加が見込めると言える。五文字ないし七文字以内の短い単語を作成することになるので、学習者の日本語能力の高低はあまり関係なく、幅広い学生

¹⁾ 第34回日本語教育連絡会議発表時の所属。2021年9月に離任。

²⁾ 友岡純子（1994）「異文化理解と季節感：俳句を教材にした日本事情の授業」
小林可奈子（2012）「俳句学習の可能性」

³⁾ 友岡純子（1994）「異文化理解と季節感：俳句を教材にした日本事情の授業」

が授業に参加できる。

2. ネヴシェヒルハジュベクタシュベリ大学（トルコ）での活動例

稿者は2019年から2020年までネヴシェヒルハジュベクタシュベリ大学に勤めており、そこで文学科目を担当していた。

2.1 ネヴシェヒルハジュベクタシュベリ大学の概要

2007年5月17日に設立された比較的新しい大学である。大学では国内の学生のみならず、ヨーロッパ、中央アジアやアフリカなどの学生も受け入れている。日本語学科は2017-2018年度より開設され、これはトルコで四番目となる。稿者赴任時には1年生～3年生まで合計約70名前後の学生が在籍していた。

一コマは90分で、教科書は『みんなの日本語』『BASIC KANJI』などを使用している。文学の授業が二・三年生で週一コマ設けられており、稿者はその授業を担当していた。

2.2 ネヴシェヒルハジュベクタシュベリ大学での季語作成と創作活動授業の概要

担当していた三年生の文学の授業で季語作成とそれを使った短歌創作の授業を行った。

三年生の在籍者数は17名で、その内、継続的に授業に参加していたのは13,4名である。日本語レベルは、クラスの内一人がJLPTのN2保持者であったがクラス全体のレベルとしてはJLPTのN3～4の間であった。文学の授業だけではなく、三年生の授業は基本的にすべて直接法で行っていた。

コロナ禍が始まる前の授業では毎回、百人一首を原作としたアニメを見せて、和歌や当時の歴史背景などを解説していたが、コロナ禍後では対面授業ができなくなったので、学生に毎週、百人一首のアニメの解説の文章を送り、その中で季語に関する宿題を出した。

宿題は以下のような形式で出題していた。

和歌に使われる言葉として「季語」があります。

次の三つの季語の意味を調べてください。

- ・春（はる）めく
- ・山笑う
- ・うららか

最終試験ではトルコの文化・風土を元にして日本語で各季節の季語を最低二語（計八語以上）作り、作成した季語の解説を日本語で書くように指示した。さらに、短歌を三首以上作ることを課し、そのうち一首は必ず自分で作った季語を使うように指示し、短歌の解説文も書くことを課した。

2.3 学生の作成例

2.3.1 季語の作成例

以下、参考として学生が作成した季語の一部と説明文を原文のまま載せる。学生が作成した季語は〈 〉でくくってある。

・春

〈数百色〉—説明文：春が来ると色々な花が咲く。

〈ノウルズ踊〉—説明文：ノウルズはトルコで行われる伝統的な春祭りです。人たちはたき火の周りを踊って回る。

・夏

〈早い離別〉—説明文：秋は徴兵される前に七月―八月から若い人たちは兵士になり、彼らの家を残します。任命を待っている役員が行く場所は、政府によって説明されます。卒業学生は彼らの新しい学校に定住するために急いでいます。

秋に始まる新しい人生のために田舎を離れる準備が夏に始まります。そこでこれらの準備が悲しみを分離の前に分離の気持ちがよく分かります。だから私はこの言葉を思いました。

・秋

〈秋には火色〉—説明文：トルコでは秋になると葉と空は赤色を変えますから、この季語を作りました。

〈葉のおどり〉—説明文：葉が落ちる時のうつくしさのこと。

・冬

〈嘘つき冬日〉—説明文：晴れた冬の日には欺瞞的なことができます。太陽は冬には外に見えますが、それがどれほど寒いかを覚えておくことが重要です。

〈虚ろの風〉—説明文：ネヴシェヒル（稿注：大学所在地）でいつも冬になったら町の周りが虚ろだからこの季語を使いました。

2.3.2 短歌の作成例

次に学生が創作した短歌の一部と説明文を載せる。短歌・説明文章ともに原文のままである。

・春

梅が咲き春を来るかな良い気持ち終わった時は寂しい気持ち

説明文：トルコでは、春には梅が最初に咲きます。春の訪れの兆しです。そして春が終わると人々は悲しくなります。春はそれほど暑くなく、それほど寒くないので、そのため、人々はとても好きです。

・夏

暑すぎる寝られないよねそれでもな美味しいすいか食べるとよい

説明文：トルコでは、夏は暑すぎて寝ることは難しい。それにしても、私はすいかが大好きなので、夏が来ると食べることができてよかった。

・秋

彩りのひまわりの花君のよう私の方を向いているんだ

説明文：ひまわりの花言葉は「あなただけを見つめる」です。それをイメージしてこの和歌を作りました。

した。

稿者注—この短歌を作成した学生は「彩りのひまわり」を秋の季語として作成していた。

・冬

夜の町せつない思もい空ろの風冷たい雨で走りたいわね

説明文：この和歌でも“雨”を使いました。今週、私の町で毎日雨が降っていました。書いた和歌のすべてを雨を見ながら書きました。だから雨が一番選んだテーマです。この和歌で自分が作った季語を使いました。

2.3.3 評価に困った作品

ここまでで紹介した季語と短歌は比較的出来が良い物を選んだが、学生が提出したものの中には評価に困るものもあった。こちらも参考までに、季語・短歌とそれらの説明文を原文のまま載せる。

【季語】

・先祖太陽

説明：私たちの先祖は“mustafa kemal atatürk”、春で生まれたですから、太陽はこの季節で一番光ると思います。春の太陽を見たとき、彼を覚えているので、この季語を作りました。

・寝られない暑さ

説明：トルコでは夏になるととても熱いので、空調とかもなかったら寝られなくなります。とてもあついこと。

・落紅葉 説明：落ちた紅葉

・ストーブ、栗を焼く/子供は外で、雪玉をする

説明：トルコでは、冬には天然ガスが来る前に人々がストーブで栗を焼きました。そして、雪が地面に落ちるとすぐに、子供たちは家を出て雪玉をするので、これらの季語を作りました。

【短歌】

・海の上池の上には太陽を見るために生き山もきれいね

説明：海と池に反射する太陽光線を楽しむために夏を待っていますけど、それらはないとき山を見ることも良いと思います。

・冬季にはストーブの上栗を焼く子供は外で雪玉をする

稿者注—この短歌を作った学生は、季語の説明文はあったが短歌の説明文は無かった。

上記の季語・短歌に低評価を付けた理由は、季語が短すぎて、説明文を読んでも理解しにくいことや、短歌が詩歌ではなくただの感想文・標語に近いものになってしまっていたからである。

学生がこのような季語・短歌を作ってしまった原因としては、季語と日常用語の違いは何か、七五調の文章と短歌の違いは何かなどを十分に指導できなかった教師の責任でもある。

また、短歌（三十一文字）という長い韻文形態で創作活動をさせたため、短めの散文の文章と、韻

文の違いが学生にとって分かりにくかったこともある。

反省点としては、前述の通り授業の後半はコロナ禍で対面授業ができなくなったことに合わせて季語作成・短歌創作の授業準備ができていなかったことと、当時はオンライン形式での授業の勝手が分からなかったため、文章上のみでの授業となってしまったことなどが挙げられる。

また、このように不完全な授業であったため、学生は日本とトルコの文化を比較して、相違を十分に学ぶことは出来なかったと思われる。今現在、振り返ってみると日本の自然などを紹介したビデオを見せて、トルコの自然と違うところを考えさせたり、調べさせたりするなどの授業方法などがあったと反省するばかりである。

3. 季語作成の授業試案

ネグシェヒルハジュベクタシュベリ大学での活動の反省を踏まえて、以下に〈季語を用いた授業試案〉を述べる。

まず、日本の季語で各季節を代表するものを教師側が恣意的に選び、学習者に紹介し、季語とはどんなものかを学んだ後、学習者が思う出身国の各季節の代表的な事物などを書く。この時に注意すべきこととしては、国（文化）によっては季節の区切りがはっきりしない地域もあるので、そのような地域出身の学習者には日本の二十四節季などの文化上の季節の区分を参考にし、春：2～4月、夏：5～7月、秋：8～10月、冬：12～1月と規定して、各月の代表的なものを書いてもらう。

季語作成における指針としては、短歌、俳句における句の文字数は5文字、7文字であるので、8文字以上の句は作らないように指示する。また、助詞の使用などを考慮に入れると、4文字、6文字あたりで季語を作ると、作品を作りやすくなると助言する。

本来ならば、学習者にはオリジナルの季語を作成してもらうことが理想だが、ハードルが高すぎる恐れがあるので、既存の季語に新たな季節感（意味）を加えることも可とする。例えば、日本では「菜の花」は春の季語であるが、前述のドイツの学生がイメージしたように晩夏（秋）の季語とするなど。

次に季語作成活動の方法について述べる。

作成する季語が少なすぎると簡単になってしまうので、各季節（の区分）に合わせて最低3語ずつ、合計12語季語を作成するのがちょうどよいと思われる。この活動を個人で行うかグループで行うかは、クラスの雰囲気を見て判断する。最後に、作成した季語について、どうしてその季節なのか、どうやって思いついたかなど、季語の説明を日本語でしてもらう。

最後に、作成した季語を使った活動について述べる。

必要文字数の少なさから、最初は俳句を作る活動にした方がいいだろう。

俳句作成指導方法はいくつか考えられるが、既存の名句、名歌の表現を模倣させることも有効である。例えば、稿者がルーマニアン・アメリカン大学で和歌・俳句講座をした時に、“冬ながら空より花の散りくるは雲のあなたは春にあるらん”（『古今集』清原深養父）を紹介したところ、“はるがきてとりがないてる そらがさく”という俳句を作った学習者がいた。最初、句意が読み取れなかったが、聞いてみると紹介した和歌の表現を借りて、この句を作ったと返答があった。

松田（2019）が報告しているような、クラスで句会を開き、学習者間で発表、評価をする活動を参考にする⁴。授業（もしくは、学期末）の最後には、クラス内で作成した季語で歳時記と句集を編み、

⁴ 松田みゆき（2019）「短詩型文学の解釈・鑑賞と創作」授業の試み」

それを印刷・製本して学習者たちの授業成果を全体で共有できる形にするのもいいだろう。

さらなる活動としては、連歌（句）→和歌（短歌）と発展させていくことや、地元に句会などがあれば学習者を句会に参加させて、日本人と交流する活動にすることなども考えられる。

4. 終わりに

以上、季語を作成する授業の試案を述べた。2021年12月現在、日本語教育の現場から離れた身となっているので、この授業案を実践する場は今の所無い状態である。いつか、この授業を実践することがあれば、その報告をどこかでしたいと考えている。

最後に、第34回日本語教育連絡会議を主催していただいたヴィータウタス・マグヌス大学 アジア研究センターの高木先生ならびに関係者の皆様に感謝の意を述べて、この論文を終わりとしたい。

参考文献

- 小林可奈子（2012）「俳句学習の可能性」『大阪大学日本語日本文化教育センター授業研究』（10）23-37
- 友岡純子（1994）「異文化理解と季節感：俳句を教材にした日本事情の授業」『言語文化と日本語教育』（7）37-47
- 松田みゆき（2019）「短詩型文学の解釈・鑑賞と創作」授業の試み『留学生日本語教育センター論集』（45）173-189